

ジオパーク秩父

日本ジオパーク委員会からの指摘事項に関するアクションプラン



秩父まるごとジオパーク推進協議会

平成 28 年 4 月

1. アクションプランの策定

2011年（H23）9月5日に、秩父市・横瀬町・皆野町・長瀬町・小鹿野町の1市4町をエリアとする「ジオパーク秩父」は、日本ジオパークに認定された。

2015年（H27）は、4年に一度の再認定審査の年として、9月の末に再認定審査現況報告を行い、10月には日本ジオパーク委員会により現地審査が行われた。

これまでの4年間は、前回の認定時に指摘のあった課題・改善すべき点を踏まえつつ活動を推進してきた。

秩父まるごとジオパーク推進協議会では、ジオパーク活動を推進することにより、多様な団体が協議会に参加するとともに、外部の連携団体や住民団体も積極的に活動に関与するようになり、ジオパーク活動が広がりを見せた成果が認められ、2015年（H27）12月にジオパーク秩父は日本ジオパークの再認定となった。

ジオパーク秩父が更なるステップアップを目指すため、今回の再認定にあたり日本ジオパーク委員会より示された「第25回日本ジオパーク委員会審査結果報告書」で指摘のあった課題等を改善するため本アクションプランを策定する。

2. アクションプランの実施期間

本アクションプランの実施期間は、2016年（H28年度）より2020年（H31年度）の4年間とする。

ただし、2019年（H31）には、次回2度目の再認定審査を迎えるため、その現地審査までには改善を図るよう活動を推進していく。

3. アクションプランの推進

本アクションプランの推進については、秩父まるごとジオパーク推進協議会の会員が中心となり進めるが、再審査時にも示したとおり、構成員以外の外部団体にもジオパーク活動が浸透し広がりを見せており、協議会体制の検討を含め、外部関係団体とも連携した形で課題解決を図るよう事業を推進する。

4. ちちぶ定住自立圏共生ビジョンとの関係

ジオパーク秩父は、秩父市を中心として近隣の4町（横瀬町・皆野町・長瀬町・小鹿野町）と「ちちぶ定住自立圏」を形成し、秩父エリア活性化のため「ちちぶ定住自立圏共生ビジョン」を策定し事業を進めている。

この共生ビジョンとの整合性を図りながら施策を実施し、1市4町での事業成果報告・効果検証を行い、必要に応じて改定・改善を行いながら事業を推進する。

【緊急に改善すべき課題】

○ 指摘事項（1）

個々の地質、動植物、歴史文化の要素や人々の活動は十分に魅力的だが、秩父ジオパークの特徴あるストーリーとして、それらの要素が大きなテーマに結び付けられているとは言い難い。

単にジオ的特徴を羅列しているのに留まっている現状を改め、地球史・日本列島史の中での秩父の大地の物語と、そこに結びついた人々の暮らしの物語を、分かりやすく伝えることができるテーマに見直し、代表的なストーリーを組み立て直すことが必要である。

そのためにまず、その見直しのプロセスを構築すること。

<改善策>

現在ジオパーク秩父のテーマを、現実の諸活動に合った、秩父地域の地質学的特徴（国の天然記念物指定等日本の中での秩父の価値）を含めて、地球史・日本列島史の中での秩父の大地の物語とそこに住んできた人々の暮らしを伝えるストーリーをベースとしたテーマの見直しを進める。

現在のテーマである「大地の守人を育むジオ学習の聖地」については、秩父は古くから研究の地としての歴史を含めて、地質学発祥の地と PR しておりサブテーマとしてなどその活用を再考していく。

<実施体制・予算>

ジオパーク推進協議会の運営委員会で検討を開始し、上部組織である実行委員会に諮っていく。

テーマが決定することにより、パンフレットやホームページなど、今後のジオパーク活動には多額の予算を伴う内容も含まれるため、定住自立圏構想の枠組みの中で協議していく。

<スケジュール>

見直しプロセスの構築は、2016年（H28）より検討を開始し、1年の検討期間を目処に2017年（H28年度中）に決定する。

○ 指摘事項（２）

そのプロセスでは、埼玉県立自然の博物館が科学的根拠を付加するとともに、これまでのジオパークの活動に関わってきた住民、ガイド、行政、研究者、長瀬の船頭や札所巡りの先達の方々を含む観光事業者などの関係者が、ともに考え続けられるよう考慮すること。

<改善策>

埼玉県立自然の博物館は当協議会メンバーであり、ジオパーク秩父の学術部門を担っているため、ジオパーク秩父のテーマの見直しには、積極的に関与して今まで以上に連携した活動を推進する。

協議会構成員ではないが、今までのジオパーク活動で広がった多くの地域の担い手とともに、ジオパーク秩父を考える機会を設け、ジオパークを語ることのできる住民や観光事業者等（タクシー運転手・ライン下りの船頭等）のすそ野を広げる。

鉄道会社との連携第一弾として、秩父鉄道電車内でのジオパーク解説等、モニターツアーを今年２月にすでに実施したところである。

<実施体制・予算>

テーマの見直しプロセスの構築には、協議会事務局と埼玉県立自然の博物館が中心となり、協議会の運営委員会で検討を開始する。

エリアである1市4町の包括観光を推進する秩父地域おもてなし観光公社との連携を図る。

<スケジュール>

見直しプロセスの構築は、2016年（H28）より検討を開始し、1年の検討期間をめどに2017年（H28年度中）に決定する。

○ 指摘事項（3）

上記のプロセスを可能にするために、各地のやり方を参考にしながら、秩父方式ともいえる事務局・運営体制のあり方を早急に検討し、1市4町が一体となって各連携組織と協働できる体制の土台作りが望まれる。

<改善策>

事務局体制については、定住自立圏構想の中心市である秩父市観光課が現在事務局としてその役割を担っているが、活動が広がりを見せており、事業が多様化しているジオパーク活動において、秩父地域おもてなし観光公社との連携を含めて、1市4町が一体となって取り組む事務局体制の在り方を検討し実現に向け推進する。

ジオパーク普及の窓口を広げるため、協議会事務局だけでなく、構成自治体1市4町の各窓口でも地域のジオパークに関する質問に答えることができ、各ジオサイトの案内等も可能にする。

これに伴う担当者の研修会、養成ツアー等を実施し、事務局より講師を派遣する。

協議会運営体制については、現在の実務者レベル全体の検討の場である運営委員会を細分化（企画部門・教育・保全部門・ジオツーリズム部門等分野別の検討組織）して、多様化するジオパークの新たな検討・活動の場を設ける。

<実施体制・予算>

事務局体制・運営体制の見直しについては、現運営委員会で検討をし、各自治体間での協議を開始する。

事務局体制の見直しは、多額の予算を伴うことであり、1市4町の定住自立圏構想の枠組みの中で議題として協議していく。

<スケジュール>

事務局体制・運営体制の見直しについては、2016年（H28年度）より検討を開始し、構成自治体1市4町の首長の理解を得ながら2019年（H31）の実現を目指す。

運営委員会内での分野別の検討組織は2017年（H29）より組織化する。

【できるだけ早く解決すべき課題】

○ 指摘事項（４）

テーマの見直しやストーリーの組み立て直しの進捗に合わせて、ガイドや地域住民、観光事業者らとともに、専門用語が多用されている看板や説明パンフレット、Webサイト等を、新しいテーマに即して分かりやすい内容に見直す活動を計画的に進めるとともに、継続的に見直しできる仕組みの構築が望ましい。

<改善策>

パンフレットや、Web サイトの内容も最初の認定以来４年が経過し、当ジオパークとしても見直しの時期となっている。

ジオパーク秩父のテーマの見直しや特徴あるストーリーの組み立てに合わせて、新たなジオパークパンフレット・Web サイト等の情報コンテンツの充実を図る。

それに伴い拠点施設等の展示・解説パネルの更新・改善を順次進めていく。

また、パンフレットについては、1市4町で様々な観光パンフレットを作成しており、今後作成するものについて、ジオサイトの記述やジオパークマーク等の掲載を実施する。

主要なジオサイトには、統一したジオパーク秩父の看板がすでに設置済であるが、新たなジオサイトについても調査・検討し、地元観光協会等の要望を踏まえ、行政担当者や住民団体等と連携して、住民の理解できる内容を考査しながら、既存看板内容の見直しをするとともに新たな解説看板設置を行う。

<実施体制・予算>

パンフレット・Web サイト・看板等の見直しは、県立自然の博物館を含む、運営委員会の企画部門で担当し進めていく。

予算については、年度計画を定め、1市4町の定住自立圏構想の予算を充当する。

<スケジュール>

新しいテーマに即した解説パンフレットを2018年（H29年度中）に発行する。

ホームページやフェイスブック等Webサイトについては、現在も随時更新を行っているが、ジオパークのテーマの見直しや、ストーリーの構築に併せて2018年（H29年度中）にリニューアルを行う。

看板については主要なジオサイトにはすでに設置済みであるため、その見直し、更新を検討し、地元の要望を踏まえて新たな看板を設置する。

○ 指摘事項（５）

今後は他のツーリズムに「ジオ味を付ける」活動に留まることなく、ジオパークらしいツーリズムの確立を目指す活動を進めること。

そのためには、都心に近い立地にある秩父にふさわしいガイドシステムや拠点整備を、札所巡りの先達や長瀬の船頭ら、従来からの秩父観光の担い手とともに継続して実施できる仕組みの構築が望まれる。

<改善策>

秩父は都心からのアクセスも便利であり、首都圏からの誘客を更に促進するため、都内等で行われる観光キャンペーンに積極的に参加する。

また都心からの玄関口となる池袋駅に情報発信拠点を持つ西武鉄道やジオトレインを運行する秩父鉄道と連携を図り、ジオパーク秩父のPRを図る。

札所巡りのガイド団体等、既存の組織との連携を更に進め、各団体の案内では触れられてこなかった大地のことを学習してもらい満足度の高いサービスを提供できるジオガイドの育成を行うため、各団体での研修会・実施研修を実施する。

商工会議所で毎年開催する秩父学検定では上級合格者が数多く存在する。

上級合格者は自然や歴史の知識は詳しいが、ガイドとしては現場での対応に弱点があるため、現地学習会等を実施して現場で語れるガイド養成につなげていく。

また、秩父市は都内の豊島区・荒川区と姉妹都市提携協定を締結しており、交流活動等連携した様々な事業を実施しているため、ジオパーク活動においても教育活動やツーリズムの受入れ等、新たに連携した事業展開を実施する。

県立自然の博物館やおがの化石館を始め、拠点施設については整備が進みエリア内1市4町8施設でジオパーク秩父のスペースを設け展示や情報発信、また全国のジオパークの紹介等を行っている。現在進行している秩父市庁舎建設に向け、新庁舎内に新たな拠点施設を整備するとともに、今後は既存施設の展示内容の更新や充実を計画的に進める。

<実施体制・予算>

首都圏等でのPRについては、事務局以外の協議会観光関係構成員も効果的なイベントに参加しPRを推進する。

ガイド養成については、事務局より講師を派遣し研修会・実地講習を実施する。

姉妹都市連携については、協議会事務局と豊島区・荒川区の文化交流担当部署と協議のうえ取り組みを実施していく。

<スケジュール>

首都圏でのPR活動については、2016年（H28年度）より毎年継続的に実施する。

都内豊島区・荒川区との姉妹都市連携については、すでに最初の事業として2016年度（H28年）6月に「大地の恵み体験ジオツアーin 秩父」の実施受入れを予定している。

拠点施設の整備・改善については、年度計画を定め順次更新していくこととし、新庁舎のジオ拠点については庁舎完成後の2017（H29年）に整備を実施する。

○ 指摘事項（6）

秩父には、「ごんべ石とま石」という言い方や、「奇岩コレクション」という科学以前からの地元なりの「地質」のとらえ方から始まり、ナウマン博士の研究や秩父鉄道のコレクション、戦時中も続いた研究などの歴史とともに、プレートテクトニクスによって大きく見直された秩父像など、「地質学発祥の地」を伝える素材は豊富にある。

テーマやストーリーの見直しの中で、「日本の地質学発祥の地」を単なるフレーズとしてでなく、ジオパークらしい文脈となるよう意味をもたせた伝え方を再考すること。

<改善策>

なぜ秩父が「日本地質学発祥の地」なのか、明治時代初期より研究が行われた地としてその研究の変遷を含めてガイド養成やジオパーク講座等において説明し、歴史を含めた情報発信を実施する。

従来のジオパーク秩父モデルコースでも、地質学の研究地となってきたことや、研究の進展に伴い変化してきた学問研究の成果等を随所で紹介してきた。

今回は「ごんべ石と真石」「功德石」「日野竜岩」等のような明治以前から秩父の人々がどう大地をとらえていたかも含め、近代地質学との連携も盛り込んだ「仮称 日本地質学発祥の地を楽しむコース」等、新たなモデルコースを設定する。

また長い間、秩父の人々がなじんできた「秩父古生層」という言葉が変化していった過程や、昭和初期に設置された秩父の地質・地形の説明看板等も保全管理し、秩父での研究の変遷を伝えていく。

ジオパーク秩父の拠点施設である埼玉県立自然の博物館は、1921年（T10年）に秩父の岩石や木材見本の展示など鑛物植物標本陳列所として開設し、戦後1949年（S24年）秩父自然科学博物館となり、1981年（S56年）に県内唯一の総合自然博物館として開館して現在に至っているが、それら古くからの自然資料の収集・保管、調査研究を行ってきた過程もジオパークに関連して情報発信していく。

<実施体制・予算>

事務局が講師を派遣し、まずは協議会構成員やジオパーク関係者の情報共有から開始する。

ジオパーク講座、ガイド養成等の予算については定住自立圏構想の予算を充当する。

<スケジュール>

「地質学発祥の地」としての新たなモデルコースの設定、研究の歴史等のガイドブック作成については、2018年（H29年度中）発行を目標とする。

○ 指摘事項（7）

初の複合指定天然記念物となる「古秩父湾堆積層及び海棲哺乳類化石群」は、単一の保全計作りにとどめることなく、それを保全・活用し、地域の誇りへとつなげて行けるよう、地域住民参加型の横断的な保全計画作りに繋げられるよう期待したい。

<改善策>

ジオパーク秩父の代表的なジオサイト等が国の天然記念物指定となり、ジオツーリズムを含め今後のジオパーク活動に大きな追い風となっている。

国の天然記念物指定となった6つの露頭と化石群については、太古の昔、秩父が海であったストーリーの構築を行い、1924年（T13年）に国の名勝・天然記念物指定となった長瀬を加えて、天然記念物ツアーコースの設定・パンフレット作成等、ジオツーリズムへの活用を推進する。

またそれらジオツーリズムへの活用に伴い、地質ポイントを見学する際の駐車場整備や解説看板整備を構成自治体1市4町で取り組んでいく。

複合指定の天然記念物の保存活用計画は、埼玉県庁、自然の博物館、1市4町教育委員会、文化庁が連携して推進する予定であるが、協議会としても積極的に参画して看板設置等ハード整備を含めた検討を開始する。

<実施体制・予算>

天然記念物の指定となった露頭については、所在自治体の教育委員会、またその内容については埼玉県立自然の博物館と連携し、解説看板設置等のハード整備の取り組みを実施する。

天然記念物の保存活用計画は、埼玉県生涯学習文化財課、埼玉県立自然の博物館、1市4町教育委員会、文化庁と連携して作成する。

<スケジュール>

協議会構成員である埼玉県立自然の博物館では、天然記念物指定「古秩父湾堆積層及び海棲哺乳類化石群」のパンフレットをすでに作成した。

ツアーコースについては2016年（H28）に設定し、PRを含めて活用していく。

天然記念物の保存活用計画の検討を2016年（H28）から開始し、2019（H30年度）の策定を目指す。

天然記念物指定の「犬木の不整合」（小鹿野町）では、駐車場の整備に向けてすでに活動を開始している。

【指摘事項】（解決すべき課題）

○ 指摘事項（8）

ジオパークに関わる新しい資源の発見がボトムアップ方式で行われるような活動が1市4町の全域に広がりつつあること、さらにジオパーク秩父の新しいテーマやストーリーに沿った具体的ツーリズムが展開されることを期待する。

<改善策>

小鹿野化石館では、多くの地元住民が採取した化石等の常設展示や、秩父の蒔田地区では、町会（自治会）独自にジオパークに関する文化展を開催するなど住民にまでジオパーク活動が浸透しつつある。

協議会としては、これら住民活動を支援するとともに、新たな住民・団体の活動展開を推進して支援していく。

現在でもジオパークの代表的モデルコースとして6コースを紹介し活用しているが、見直しをする新しいテーマのコース設定や指定となった天然記念物を巡るコース、またエリア内大滝地区ではマグマの陥入がもたらした恵みによって、秩父の山中に出現し消えていった人々の暮らしのストーリー等を新たなツーリズムの候補地として着目しツアーを企画・実施していく。

<実施体制・予算>

協議会構成員であるNPOのガイド団体（5団体）の他にも、秩父地域おもてなし観光公社で「秩父案内人倶楽部」（任意団体等11団体）が組織されており、ガイド養成等を含め、ジオツーリズムについて新たな連携を図る。

<スケジュール>

大滝エリアの新コースについては、調査を含め2017年（H29年）に設定しモデルコースパンフレットの作成を実施する。

新たなテーマによるモデルコースの設定については、テーマ見直しと併せて検討を進める。

○ 指摘事項（9）

初の複合指定天然記念物となる「古秩父湾堆積層及び海棲哺乳類化石群」の今後策定される保全計画が、化石群の保全や活用において、日本や世界のジオパークのモデルケースとなることを期待する。

<改善策>

天然記念物指定「古秩父湾堆積層及び海棲哺乳類化石群」は、地元住民をはじめ、新たに多くの人々が秩父の大地に目を向け、その貴重さを知るきっかけとなっている。

学校教育についてはエリア内で実施が遅れている地域もあるため、地元の良さを知り、郷土愛を育むためにも小中学校において総合学習等の時間を利用して天然記念物指定を含めてジオパークを学ぶ機会を1市4町の教育委員会で計画する。

地元の子どもたちが化石について学習することにより、新たな天然記念物となる化石を発見することにもつながる効果が期待される。

当協議会メンバーである秩父鉄道や西武鉄道をはじめ、バス会社とも連携を図り、天然記念物見学を盛り込んだツアー等と呼びかけ実現する。

<実施体制・予算>

ジオパーク教育については、各教育委員会と協議会事務局のみならず、多くの専門知識を持った学芸員がいる埼玉県立自然の博物館と連携して実施していく。

<スケジュール>

2016年（H28年度）より全県で使われる中学理科の副教材として「理科資料集」には、ジオパーク秩父の内容が掲載され活用される予定となっており、天然記念物指定の内容を含めた学習が期待される。

学校教育については、2016年（H28年度）より各教育委員会と連携してジオパーク教育を計画的に実施していく。

日本ジオパーク委員会より指摘をうけた課題

※ 項目は、2016年1月29日付「第25回日本ジオパーク委員会審査結果報告書」より抜粋

No.	項目	達成年度
1	ジオパーク秩父のテーマの見直し	H28
2	観光事業者との連携強化	H28
3	事務局体制・運営体制の見直し	H31
4	パンフレット・WEBサイトの見直し	H29
5	ジオツーリズムの確立と継続して実施できる仕組みの構築	H29
6	「地質学発祥の地」のストーリー構築・発信	H29
7	複合型天然記念物指定に伴う保全・活用の検討	H30
8	新しいテーマやストーリーに沿ったジオツーリズムの展開	H29
9	複合型天然記念物指定に伴う保全計画の策定	H30